HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オランダ探訪 ： 水と共存する都市と建築
Author(s)	森, 傑
Citation	センターリポート, 53(2), 20-23
Issue Date	2023-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90143
Type	journal article
File Information	Cent Repo.53-2_20-23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

海外訪問記

オランダ探訪
～水と共存する都市と建築～

森　傑
北海道大学大学院工学研究院・教授

1. はじめに

オランダは、国名である Nederland（ネーデルラント）が“低地の国・地方”を意味する通り、国土の4分の1は海抜0m以下、半分が海抜1m未満である。そのため、堤防や水門、水路、橋、ダム、防波堤などを数多く見ることができ、道路より高い所に運河が通っていることも珍しくない。オランダの都市と建築の歴史は水との闘いにあり、生活と社会に根付いた治水の知恵を多く学ぶことができる。

本稿では、2023年2月に滞在したアムステルダムとロッテルダムを中心に、筆者が特に関心を持った場所や建築についていくつか紹介したい。

2. 北のヴェネツィア

オランダと聞くと思い浮かべる水車は、もともとは揚水を目的に造られてきたものである。首都のアムステルダムは、湿原だったところを26基の風車を外周に配置して囲み、低い土地を干拓してできた街である。

その忍耐強い都市の形成が生んだ網の目のようにつながる運河の景は「北のヴェネツィア」とも呼ばれ、2010年には「アムステルダムのシンゲル運河の内側にある17世紀の環状運河地域」として世界遺産に登録された。環状運河地域は、同心円状に流れるシンゲル、ヘーレン運河、カイゼル運河、プリンセン運河、シンゲル運河の5本が骨格となり、扇形の美しい街並みを維持している（写真1）。

筆者の海外出張は、昨年からコロナ禍前のペースに戻りつつある。オランダ滞在の前にも、2022年にシドニーを2回訪問している。8月の滞在時には既にあらゆる場所でノーマスクになっていた。入国後直ぐにマスクを着用して入店したバーガーショップでは、注文の際にノーマスクの店員に「聞き取りづらいのでマスクを外してくれ」と言われるくらいだった。

写真1　16世紀まで外堀だったシンゲル沿いの街並み

写真2　「アムスのへそ」と呼ばれるダム広場

2023年2月の日本はまだマスク着用が求められていた中で、アムステルダムの名所の一つであるダム広場には多くの人がノーマスクで集まり、観光客でにぎわっていた（写真2）。

3. 水の上も敷地

写真3は、環状運河地域を歩き回っていた際に見つけた駐輪場だ。運河の本家・イタリアのヴェネツィアと同様、アムステルダムも移動手段として水路が活用されているが、それ以上に自転車での移動が浸透している。

写真3　花市場近くの運河に浮く駐輪場

写真4　自転車移動が浸透している市街地

写真5　Silodam のカラフルな外観

写真6　キャンチレバーが目を引く Oklahoma

写真7　水中へ足を下ろして立つ Silodam

自転車専用レーンは国中に張り巡らされており、オランダはしばしば自転車大国とも言われる（写真4）。アムステルダムでは人の数より自転車の数の方が多く、国全体でも人口の約1.5倍の自転車台数になるらしい。そのオランダの人々の生活を支える自転車の置き場として確保されたのが、運河の上というわけだ。

アムステルダムを散策すると、建物の敷地の概念が日本と大きく異なることを実感する。写真5は、Silodam という集合住宅。コンテナ船をモチーフにしたカラフルな外観が特徴的である。設計は、オランダを代表する設計集団 MVRDV。MVRDV が手がけた建築は世界各国で見ることができるが、彼らが広く知られるようになった建築の一つが、同じくアムステルダムにある Oklahoma で、主に高齢者が入居する100戸の集合住宅である（写真6）。87戸しか収まらなかった初期計画の課題を、キャンチレバーで13戸追加するという大胆な手法で解決している。

Silodam に話を戻すが、この集合住宅は水の上にある（写真7）。日本であれば、もし海や川へ敷地を求めるとすれば、まず埋め立てて土地を確保することを考えるはずだ。日本では敷地はあくまで地面にある。アムステルダムを滞在していると、建築が地面の上に立つという当たり前の感覚とのギャップを楽しむことができる。人々の生活とその価値観はまさに水とともにある（写真8）。

写真8　水路へのアクセスを持つテラスハウス

4. ウォータースクエア

ロッテルダムは、アムステルダムに比べるとかなり近代的なつくりの都市である。第2次世界大戦中の1940年にドイツ軍の激しい爆撃に遭った。街の中心部はほとんど破壊されたが、1953年に整備された「世界で最初の歩行者天国」と言われる

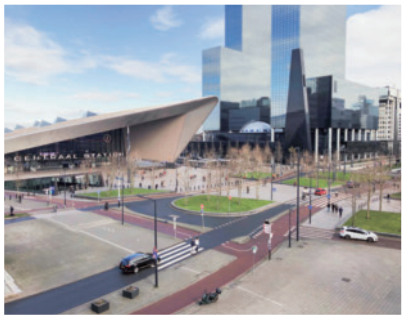

写真9　歩行者・自転車・トラムが交わるロッテルダム駅

写真10　盆地のコートで駆け回る子どもたち

写真11　説明文は、「駐車場と後ろの建物からの水を広場に集めます」

ラインバーン商店街に始まり、市民の快適な移動と滞在を重視した都市づくりがなされてきている（写真9）。

今回の滞在で最初に向かったのは、実はロッテルダムの Waterplein だった（写真10）。20世紀後半に建設された建物群に囲われてただ空いていただけのスペースに、屋外円形ステージ・バスケットボールコート・スケートボードリンクとして使用できる広場が挿入された。

ロッテルダムでは毎年の大雨で市内の多くの地域が浸水しているため、市は近年、雨水を集めて貯める地下タンクの建設を推進してきた。しかし、この方法は建設費が高く、市民にとって目に見えない存在であるため、必ずしも多くの賛同を得ることができていなかった。そこで、Waterplein のプロジェクトでは、市民参加型の計画プロセスを採用し、近隣施設の利用者や地区住民が集まったワークショップを開催しながら、雨が降ったときには近隣の水が広場に集まる“見える化”のデザインが採用された（写真11）。

5. 浮かぶ建築

写真12は、NGO の Global Center on Adaptation のオフィスである。ロッテルダムの歴史的な港・レインハーフェンに浮いている。この事務所建築は、日本のように埋め立てているのでも、アムステルダムの Silodam のように杭を打っているのでもない。再生コンクリートで造られたフローティングベースの上に乗っており、このベースはマース川の水を利用した熱交換システムを持つ。屋根の南向きの斜面には約900㎡のソーラーパネルを設置、北側は緑化、雨水の再利用も行っているグリーンビルディングである。なお、隣には宿泊施設もある。次の滞在の機会があれば、浮いている宿で一晩過ごしてみたいと思う。

写真12　港に浮かぶ Global Center on Adaptation のオフィス

6. 市場＋集合住宅

最後に紹介するのが、今回の滞在で「絶対、訪れよう」と決めていた Markthal である。Silodam と同じ MVRDV による設計で、構想から約10年かかって2014年にオープンした。山にトンネルを通したような姿のインパクトのあるランドマークとなっている（写真13）。

注目すべきは、フードマーケットと集合住宅の複合施設という点である。しかし、これを平面やボリュームで分けた2つの用途を単純に接続しているのであれば、あまり驚きはない。約230戸のアパートメントが高さ40mの擁壁としてトンネルをつくり、約100軒のフードショップを内包している。

中に入るとまず、花や果物が描かれた鮮やかな壁画が目に飛び込んでくる（写真14）。歴史的な名画が描かれているわけではないが、不思議とヨーロッパの教会建築の中で見上げているような感覚になった。また、集合住宅がこのトンネル市場に無関係ではなく、ちゃんと各住戸の窓が開いているのもおもしろい。ランチを兼ねてふらふらと軽食や買い物を楽しんだのだが、コロナ禍の感覚を多少引きずっていた筆者は、普通に試食が提供されていたことが妙にうれしかった（写真15）。

写真13　集合住宅で市場を内包する Markthal

写真14　鮮やかな壁画がある Markthal の内観

写真15　個性豊かなフードショップでにぎわう市場

7. おわりに

アムステルダムやロッテルダムの都市づくりは、人間が自然と闘ってきた歴史である。むしろ、人間が住みたい場所を人間の力（技術）によって強引に開拓してきたと言える。

それは確かに世界遺産になるほどの美しい街並みを造ってきたが、今回の訪問を通じて、オランダにおける都市・建築と自然㈬との関係の変化を確認することができた。つまり、自然の脅威を乗り越え支配しようとする姿勢ではなく、自然と共存し脅威を受け流そうとするアプローチだ。

筆者らは、書籍『みんなで30年後を考えよう北海道の生活と住まい』（中西出版、2014）を通じて、これからの住生活のビジョンとして「制する技術からしのぐ文化へ」を提唱したが、それと通ずる価値意識を感じた。